





疲れて部屋に帰って来て、初めて壁の穴に気が付いた。

その穴は天井近くの壁に、ぽつりと開いていた。孝史は穴をまじまじと見つめ、考え込んだ。この穴は前からあったものだろうか。それとも何かの拍子に自分が開けてしまったものだろうか。

孝史がこのアパートに引っ越してきたのは、半年ほど前の、冬だというのに篠つく雨が降っていた酷く寒い日曜日だった。パラサイトシングルなんていう言葉が流行り、世間体を考えての引っ越しであった。特に事前準備もしていなかったため、入居した時の荷物は数えるほどで、まるで家出少年のようであった。

それからというもの、孝史は休みになるたびに、リサイクルショップや百円ショップを巡り、少しずつ家具を増やしていった。さして人に言うような趣味を持たない孝史にとって、週末の家財探しは一つの趣味となっていた。暇さえあればリサイクルショップに顔を出すもので、リサイクルショップでは孝史のことを、多少の皮肉を込めて、ミスターリサイクルと呼んでいることを孝史は知っていた。

そんな家財探しも半年もすればほぼ終焉してしまった。買う物がなくなってしまった

のだ。必要以上に物をそろえるのは孝史の趣味ではなかった。二、三週間暇を持てあましたのち、孝史は模様替えを趣味にした。

模様替えといったところで、こじんまりとした部屋に、こじんまりとした家具があるだけの部屋だ。大した模様替えはできない。それでもベッドの位置をずらしてみたり、テレビの位置を変えたりするだけで、結構気分が変わるものだ。

ところがこの模様替えもいい加減飽き始めていた。

そこで孝史は物をずらすだけではなく、壁に何かをぶら下げたり、柱に釘を打ったりし始めた。それが先週からのことである。壁にぽっかりと開いた穴は、果たしてその時に開けてしまったものなのか、家具をぶつけた結果なのか。あるいは始めから開いていたものなのか。孝史にはとんと見当がつかなかった。

孝史は穴をじっくりと眺めた。そしていくつかの事実気が付いた。

穴は天井にほど近く、身長百八十センチの孝史でも開ける為には台に乗る必要があった。

また穴は拳ほどの大きさで、かつ完全な円形だった。まるで機械で開けたような形だ。家具をぶつけたとしたら、こうはいかないだろう。

最後に穴の縁には綿埃が多量に積もっていた。

これらを考え合わせれば、この穴が孝史が開けたものではないということがわかる。孝史は壁をいじるのに、台に乗った覚えは一度もなかった。

では一体何の穴なのか。

孝史ははたと気が付いた。

天井近くに開ける穴といえば、エアコンしかない。これは前の住人がエアコンを付けるために開けていったものに違いない。それならば形についても、綿埃についても説明がつく。

ところが次の瞬間、それはとんでもなく事実と反することだと気が付いた。穴は窓とは反対の壁に開いているのだ。それでは室外機はどこに置けばよいのか。パイプをトイレの上を通して玄関の脇に置かねばならない。そんなムダなことをする人間はいないし、玄関の上に穴が開いていたとは記憶していない。なぜならこのアパートは廊下の屋根がすごく低く、長身の孝史は頭をこすりそうになるからである。つまり玄関の扉のすぐ上は、もう屋根なのだ。

ではあの穴は一体何なのか？

孝史はしばらく穴について思い悩んでいたが、孝史が開けた訳ではないということが分った以上、悩んでも仕方ないと判断した。そして冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、一瞬だけ穴に目をくれただけですぐ穴のことは忘れてしまった。



それからしばらくの間、孝史は穴のことはすっかり忘れていた。一旦気にならなくなれば、どんな大きな穴であろうと染みと変わりはなかった。

孝史は週末が来るたびに、新しい趣味を探した。

一時は料理に凝った。料理は奥が深く結構のめり込んだ。そして台所に立つうちに、いかに台所が汚いかに気が付いた。結果その次に凝ったのは掃除だった。これはなかなかやりがいがあった。

そもそも孝史の住むアパートは、築二十年は経過している古い木造だった。そして前の住人はあまり掃除に頓着しなかったと見えて、よく見れば汚れている場所はいくらでもあった。窓の棧に溜まった土埃。風呂場の黴。便器の黄ばみ。レンジ周りのこびりついた油。探せばいくらだって綺麗にする場所がみつかった。そして梁の上に埃が積もっているのを拭き始めて、久しぶりに穴の存在に気が付いた。

そういえば綿埃が積もっていたっけ。

孝史は穴の埃を払うべく、椅子の上に乗ると初めて穴を間近に見た。

穴が広がっていた。

以前の記憶では、穴は確か拳大だった筈だ。ところが今の大きさはどうみてもハンドボール大だ。孝史の拳などやすやすと入ってしまう。

あるいは下から見上げるのと、間近で見るとは違うのかもしれない。

孝史は椅子をおりると、畳にあぐらをかいて穴を見上げた。小さくなど見えなかった。やはりハンドボール大に見える。ということは、誰かがこの部屋に侵入して、どういう訳なのか、穴を広げているということだ。なんと物好きなことか。

さもなくば、穴が勝手に広がっているのか。そんな筈があるわけがない。

孝史はいぶかしげに穴を見つめた。しかしいくら見つめたところで筈が見つかるわけでもなかった。孝史は考えないことにして、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。



その日は残業で酷く疲れていた。孝史はコンピュータのソフトを開発する会社に勤めていたが、会社自体があまり大きくないせいもあり、仕事は主に大手コンピュータ会社からの下請けだ。大手は独自の設計方法が社外に流出するのを嫌い、下請会社にあまり情報を流さない。結果孝史のような末端の設計者は、自分が一体何のためのソフトを造っているのかすら分らない。ただひたすら、巨大なシステムの一部の機能を造り上げていく。根気のいる仕事だ。納期も迫っており、孝史は連日深夜まで残業する日々が続いていた。

だから孝史は部屋に戻って来ると、ビールをひと缶燻るように飲み、すぐにベッドに横になった。穴のことなど少しも思い出さなかった。

ところがこの日は酷く暑く、夜中に目を覚ますほど寝苦しかった。孝史は目を覚ましては、寝返りうち、また浅い眠りに落ちていく、ということを幾度となく繰り返していた。

そして何度目かに目を覚ましたとき、畳の上に何かがどさりと落ちる音を耳にした。

だが孝史は何度も眠ったり、目を覚ましたりを繰り返していたせいで、意識がはっきりとせず、本当に音を聞いたのかどうかもわからなかった。だからといって、わざわざ起きて確認するのも億劫だった。明日も辛い仕事があるのだ。そんなことをするのなら、一分でも余分に眠りたかった。結局孝史は筆筒の上の何かが、たまたま落ちただけだろうと考え、再び眠りに落ちていった。

翌朝、目覚まし鳴り響いたとき、孝史の頭からは昨晚の音のことなどすっかり消え去っていた。

孝史はいつもの朝のように、慌てて飛び起き、朝食もそこそこに身支度を始めた。

急がなければいけない。今日は納入するソフトの審査会議があるのだ。それまでにすっかり資料を整えておかなければならない。孝史は壁につるしたままのスーツに駆け寄った。その拍子に何かに蹴つまずいて、壁にもろに額をぶつけた。

「あ痛た」

「痛てえ」

「うるせえ」

大した音ではなかったと思ったが、隣の男が怒鳴っていた。隣は音に敏感なのだ。

孝史はぶつけた頭をさすり、身の不運をなげきながらも立ち上がり、スーツに手を伸ばした。そしてそこではじめて、蹴つまずく原因となったものを足許に発見した。

そこには熊のぬいぐるみが転がっていた。

孝史はしばし時間が無いことも忘れてぬいぐるみに見入った。一体なぜここにぬいぐるみがあるのだろうか。

確かに孝史はおとなしい性格で、趣味といえば雑貨店巡りとか、部屋の模様替えとかいった、どちらかと言えば女性的なものが多かった。だからといってぬいぐるみを集める趣味は一度も持ったことがない。さらに言えば、風采の上がらぬ孝史にはここ数年、ぬいぐるみを部屋に持ち込もうとする類の知り合いはいなかった。孝史は考え込んでしまった。一体誰のぬいぐるみで、なぜこの部屋にあるのか。

突如、携帯電話が鳴った。

物思いに耽っていた孝史は、驚きで飛び上がらんばかりであった。五分後に部屋を出なければ、いつもの電車に間に合わないことを知らせる、携帯のアラーム音であった。孝史はぬいぐるみのことを一時棚上げし、慌てて着替えを済ませると、鞆を持って部屋を飛び出した。

電車に乗り込んだ時、すでに孝史の頭にはぬいぐるみのことはなかった。孝史は会議をどう成功裡に終わらせるかに思いを馳せていった。

部屋に帰り着いたのは、いつもより更に遅い、深夜二時だった。完全に疲れ切っていて、ビールを飲む気にもならなかった。

会議は酷い有様だった。連日あれだけの作業を続けたにもかかわらず、そこかしこに不具合が見つかり、早急に手直しを求められたのだ。次の会議は三日後だ。それまでに指摘された不具合を全てクリアにする必要があった。孝史は会議直後から、猛烈な勢いで手直し作業を進めたが、真夜中を過ぎた段階でも、三日後の会議に提出できるような成果を上げることは、まず無理だと思われた。

孝史を落ち込ませている理由はもう一つあった。

憧れの女性である由美子から、今回の会議の結果で蔑むような眼差しを浴びたことだ。

由美子は孝史の同期であったが、孝史よりもはるかに出来が良く、すでに数人の部下を持つ身だった。明るい性格は誰からも好かれ、長いストレートヘアと、モデルのような肢体は男子社員の憧れの的だった。

その由美子が孝史の失敗を蔑んでいた。わたしならそんな新人のようなヘマはしない。一体何年この仕事をやっていると思っているの。あなたこの仕事に向いていないんじゃない？ その目は如実にそう語っていた。

孝史はネクタイを放り投げると、スーツ姿のままベッドに倒れ込んだ。

「おい、三本しか無いネクタイの一つなんや。もっと大事にしいや」

突然の声に、孝史は飛び起きた。

「誰だ」

電灯は点けっぱなしだった。部屋に誰もいないのは一目瞭然だった。

幻聴？

孝史は寒気がしてきた。冗談じゃない。幻聴だって？俺は狂っているのか。しかもなぜか関西弁だ。

孝史は自分の状態を思い浮かべてみた。

考えても見ろ。ここ数ヶ月、十二時前に部屋に戻ったことなど一度もないじゃないか。疲れているのだ。幻聴かどうかはさておき、これはある種の警告なのだろうと思った。これ以上無理をすれば、時々街で見掛けるような、目に見えない妖精に話しかけている人のようになりかねない。無理をせずに身体を大事にしたほうがよい。そういう警告なのだろうと。

孝史はズボンとワイシャツを脱ぎ捨てると、冷蔵庫から缶ビールを取り出し、煽るように飲み干してベッドに潜り込んだ。

会議の日から二日が経過したが、不具合修正の成果は上がっていなかった。ひょっとして自分は本当にこの仕事に向いていないんじゃないか。そう考えながら、明け方も近くにアパートの扉を開けた。明日の、正確には今日の午後には再審査の会議がある。その時に不具合が全て修正されていなかったら、一体どうなってしまうのだろうか。

「クビ」という言葉が脳裡をよぎった。

まさかそんなことはあるまい。たった一度納期に遅れただけで、クビということはないはずだ。

本当にそう言えるのか？

心の声が応じた。

「黙れ」

孝史ははっとして口を押さえた。隣の男は寝静まっていた。気を付けなければならぬ。ここで新たな問題を抱え込みたくはない。孝史は足を忍ばせながら、冷蔵庫まで歩み寄ると缶ビールを取り出した。

翌朝、誰かが激しくドアをノックする音で目が覚めた。目覚まし時計を見ると五時だった。眠りについてから一時間しか経っていない。一体何事なのか。

半分寝ぼけたままドアを開くと、今時珍しいパンチパーマの人相の悪い男が立っていた。

「どなた？」

「隣の半田だ。あんたいい加減にしてもらえねえかな。何度も夜中に大声だしてよう。

こっちは毎朝この時間に出ていくんだ。夜中に遊び半分でたたき起こされちゃあ、たまんねえよ。あんたに出て行って貰うよう、大家に頼んでおくからよう。覚悟しておいてくれよな」

半田と名乗った男は、それだけ言うと孝史の意見など聞きもせず去っていった。

孝史は呆然と半田を見送った。

出ていけとはどういうことだ。自分が一体なにをしたというのか？そこで孝史ははたと気が付いた。そういえば夜中に大声を出して、口を押さえたことを。たったそれだけのことで出て行かねばならないのか。孝史は怒りがこみ上げてきた。あの男が大家に直訴するというのなら、こちらから先に言い分をぶちまけてやる。だいたいあの男だって、始終部屋に女をつれこんで、いやらしいことをしているじゃないか。その音だけを聞かされるこっちの身にもなってみろというのだ。

まだ眠くて仕方がなかったが、怒りで興奮し、もう寝付けそうになかった。孝史は冷蔵庫の扉をひらいて缶ビールをとりだそうとした。そこで今は夜ではなく、これから会社に行かねばならないということに気が付いた。本当に今日の会議を乗り切れるのだろうか。不安がさっきまでの勢いを削いでいった。大家に意見を言いに行ったところで、聞き入れてもらえないかもしれないではないか。何しろ家賃は振り込みだし、大家とはもう一年も顔を会わせていない。

孝史は絶望感につつまれ、その場にへたりこんでしまった。

「そう、くよくよせんとき」

「だ、誰だ」

自分の声の大きさに驚き、慌てて口を塞いだ。

「誰だ」

こんどは控えめに尋ねた。

部屋に他人がいる様子はなかった。

「誰はないやろ。自分の大親友に向かって」

またしても無人の部屋からの声。

孝史は用心しながら、部屋の各所に目を走らせた。

「どこ向いとるんや。ここや」

そして最終的に視線が落ち着いたところといえば、あの熊のぬいぐるみだった。いつの間に移動したのか、熊のぬいぐるみは筆筒の上に置かれていた。

置かれているという表現ははっきり言って無理があった。そのぬいぐるみは、筆筒の縁から組んだ足をぶら下げ、顎をさすりながらこちらを眺めていたからである。

「そう驚かんといてや」

体調五十センチの熊のぬいぐるみに不釣り合いな、大人びた声があった。

「わいは二日前からここにおんねんで」

「二日前って何の話だ。お前何者だ。何でここにいる。何をしようってんだ。一体何なんだ」

熊はアメリカ人のような仕草で、あきれたもんだと肩をすくめてみせた。

「初めて言葉を交わした相手に対する態度とはほど遠いけど、ひとつひとつ答えたらか。

先ず第一に、二日前の夜中にわいが畳に落ちる音を聞いたやろ？

第二に、わいは自分の親友や。正確には親友になれるかもしれない相手という意味やけどな。お前親友なんておらんやろ。

第三と四は、これはちいと難しいな、まあ平たく言えば、お互いの利益のためちゅうこっちゃな。

最後に、孝史自分、ああ、これからわいは自分のことは孝史って呼ぶぞ。

ええと、孝史お前は今、ごつつうまずい状況におんねん。何ちゅうかな。ネジのゆるんだジェットコースターに乗って、まさしく一番の難関にさしかかろうってところや。ここで下手打つと」

熊がボタンの目でじっと見つめてきた。ただのボタンのはずなのに、なぜか迫力があつた。

「孝史の人生はこれ以上ないってくらい、絵に描いたような不幸にみまわれる」

「不幸？」

「そう、不幸」

「どんな」

熊は腕を組むと、しばし考えに耽った。そしておもむろに

「そやなあ。アパートを追い出されて、たまたま入居できた別のアパートで殺人事件が発生して、重要参考人にしたてあげられるとか」

「重要参考人だって？」

「会社の横領事件の片棒を担がされて、十年の禁錮刑を言い渡され、ムシヨん中でやくざの情夫に成り下がるとか」

「情夫う？」

孝史は腕つぶしの強そうな、やくざに迫られている自分を想像して、吐き気を催した。もし本当に迫られたら、自分には対処できないだろう。残された道は一つしかないということだ。

落ち込む孝史を見て、熊は孝史を慰めるように叩いた。

「気にするなって。まだ決まった訳やない」

孝史は熊の方を見ようとしなかった。不幸という言葉と、今日の会議がイコール記号で結ばれてしまった。もうぬいぐるみの熊が喋ろうが、なんだろうがどうでもよかった。自分の社会人生活が、きっと今日の会議で終わるのだ。そう考えるとなんだか下腹が痛くなってきた。孝史はトイレに駆け込んだ。

トイレでしゃがんでいると、熊がロックもせず扉を開けた。ボタンの目が隙間から覗いていた。

「孝史大丈夫か？」

「開けるな。ロックぐらいしろよ」

咄嗟の言葉に、孝史は自分が言葉を喋る熊のぬいぐるみを、完全に受け入れてしまっていることに気が付いた。

なんてこった。不幸だって？だったらこれこそまさしく不幸じゃないか。

「すまん。ロックはしたんやけど、なにせ」

熊は柔らかい手で扉を叩いて見せてから、肩をすくめて扉を閉めた。

腹具合がようやく収まって部屋に戻ると、煙草の煙がたゆたっていた。

「おい、何をしてるんだ」

振り向いた熊は孝史の背広から煙草を抜き取り、勝手に吸っていた。

「一本もろうたぞ」

「貰ったって、俺は部屋じゃあ吸わないことにしているんだ」

「ええやないか。ケチ臭いこと言うな」

熊はそういうと缶ビールを煽った。

「俺のビール……」

孝史の言葉は大きなゲップにかき消された。正しく不幸の始まりのようなゲップ。

孝史は会社の帰りに転職情報誌を買っておこうと心に決めた。



会議は信じられないくらいスムーズに進み、終了した。孝史が造ったソフトは、条件付きであるが、審査終了の印鑑を貰うことができた。その条件も、依頼元会社への納品後に不具合が発生した場合、早急に不具合を修正すること、という実に曖昧で楽なものだった。思い当たる不具合は納品までの間に修正できる。

先日の厳しい審査に比べ、何故今回はこんなにも楽だったのだろうか。偶然ばかりではあるが、考えられる理由はいくつかあった。

まず、一番厳しい部長が今日は緊急出張でいないことだった。

次に、部長代理は部長からのたび重なる電話で、ほとんど孝史の話を聞いていなかった。

そして、同僚の中では厳しい手合いである、由美子は何故か心ここにあらずといった状況だった。

会議終了後、会議がうまく行ったこともあり、気持がかなり高揚していた。誰かにこの気分の良さを伝えたかった。そこへ偶然由美子が通りかかった。暗い顔をしていた。思わず、

「気分でも悪いの？」

と尋ねていた。

由美子は一瞬驚きの表情を見せたあと、葛藤を含んだ表情をした。相談をしようかどうか迷っているのだ。しかし目の前にいる相手は、同僚で一番頼りない孝史ときている。

「俺、大した役には立たないと思うけど、相談があれば乗ってもいいよ」

いつもの由美子ならば「あなたにする相談なんかないわ」と強気の言葉を残して去っていったらう。だが今日の由美子はいつもの由美子では無かった。由美子は迂闊にも孝史の目の前で涙をこぼしてしまった。

「私ね。ある人に交際を迫られているの」

会社の向かいの喫茶店で由美子はそう切り出した。

「交際」

「そう」

聡明なる由美子が悩むくらいだから、それは決してまっとうな交際では無いだろう。それに由美子ほど美人ならば、相手を選ぶことくらい簡単なはずだ。それを涙を流してまで悩むということは、かなり圧力がかかっているということかもしれない。だが、こんなマドンナを絵に描いたような由美子ですら、悩むことがあるということに、孝史は由美子も自分と同じ人間なのだと思った。

「よく分らないけど、断れないのかな。その相手に」

由美子は一瞬いつもと同じ、きつい目で孝史を睨みつけた。

「断れるくらいなら、もうとっくに断っているわ。相手は部長なのよ」

その相手に愕然とした。部長だって？それってつまり不倫ってことじゃないか。孝史は世の不公平さに腹が立った。そして由美子を何とかしてあげたい、という気持よりも、部長をとっちめてやりたいと思った。しかし相手が部長では手も足も出ない。

そんな孝史の意気消沈した顔を見てか、由美子は財布と携帯電話を掴むと、

「あんたなんかに相談するんじゃないわ。誰かに言ったら承知しないから」

と言葉を残して店を出ていった。孝史もまた、気軽に相談に乗るのではなかった、と後悔した。

部屋に帰ると、まず煙草の臭いが鼻についた。すっかり忘れていたが、朝の出来事は現実なのだ、ということに嫌というほど再認識させられた。由美子よりも俺の方がよっぽど不幸だと思った。

テーブルの上にはどこから仕入れてきたのか、ラッキーストライクの吸い殻が、空き缶の上で山盛りになっていた。そして空き缶の数といったらあきれて数える気にもなら

ない。肝心の熊は孝史のベッドを占領して、大いびきをかいていた。姿形は違うけれど、これを疫病神と言わず何と呼べばよいのか。

孝史は熊を放り出す算段でも練ろうと、冷蔵庫を開けて啞然とした。一本のビールも無かった。さっと頭に血が上った。いつもなら頭に血が上るより早く、何故こんなに不幸な目に遭うのか、と嘆く孝史であった。だが今日はいつもと何かが違った。孝史は熊の胸ぐらを掴むと、目の高さまで持ち上げた。

「誰がビールを飲んでいいと言った」

熊がいかにも眠た気に身もだえした。そして大きなビール臭いゲップ。

「おい、起きろ。この盗人」

「大きな声を出さんといてや。頭に響くがな」

「誰がビールを飲んでいいと言った」

「同じことを何度も言わんでも、ちゃんと聞いとるがな。それより会議の結果はどうやった」

孝史は熊を揺すった。はたから見たら気違いそのものだ。

「俺の質問に答えろ」

「そう怒るなって。勝手に飲んで悪かった。すんまへん」

「飲んだ分は弁償してもらおうぞ。それとあの煙草はどこから仕入れた。俺のじゃないだろう」

「隣」

熊は悪びれる風もなく答えた。

「隣？」

孝史は半田の顔を思い出し、急に威勢を失った。また怒鳴り込まれたらどうしようか。そんな不安が心を占め始めた。

「ほれ、朝怒鳴り込んできたけったいな奴がおったろ。あいつの部屋や」

「侵入したのか？」

「あんな鍵、子供でも開けられるがな」

孝史は気が遠くなった。もしあの半田という男が怒鳴り込んできた時、この部屋を覗いたらどうなるのだ。今以上に話がこじれてしまう。熊が盗んだと言ったところで、誰が信用するというのだ。さっきの大声できっと半田は怒鳴り込んでくるはずだ。孝史は泣きたい気持になった。

「大丈夫。誰にも見られてない」

「そういう問題じゃないよ」

「大声を出すなって。また怒鳴り込まれるぞ」

孝史の顔が引きつった。

熊はそれを満足気に見ながら言った。

「半田は今日は帰って来ん。女の所にしけこんどる」

熊がいやらしく笑った。

孝史はこのとき始めて本当の殺意というものを感じた。しかし相手がぬいぐるみの熊では間抜けそのものではないか。孝史は情けなくてもう熊を持ち上げていることもできなかった。

「そないなことより、会議はどうやった。えかったやろう？」

孝史は一瞬あの、会議が成功裡に終了したときの高揚感を思い出した。よかったかだつて？完璧と言っていい。だがなぜ熊が知っているのか？電話した覚えもない。

「何でわいが知つとるのかって聞きたいんやろう？そりゃあ俺たち親友やからな」

「親友だなんて思ってないぞ。お前には出ていってもらうからな」

熊は肩をすくめた。

「わいにまたあの穴に戻れっちゅうんか？出るの大変やったんやで。ほんま」

孝史は指さされた穴を見つめた。数日前のあの音はこいつが穴から落ちた音だったんだ。穴のことを思い出したと同時に、数々の質問が奔流のようにあふれ出してきた。それを察したらしく熊が手を伸ばして質問を制した。

「質問はなしや。親友でいられなくなるからな。そないなことより、孝史、まだわいを信用していないやろ」

あきれた奴だ。信用できる何があるというのか。

「明日を楽しみに待っとき。そうすればわいを親友と思うようになる。二時に携帯を持って地下倉庫に行ってみいや。わいを叩き出すのはそれからでも遅くはないやろ。たいした実害があるわけなし」

実害なら十分あるさと思いつつも、二時に何が起こるのかを知りたくなった。

「二時に何があるんだ」

「行けばわかる。それよっか、孝史、女おらんやろ」

と言って、熊は無いに等しい小指を立てた。

またぞろ怒りがこみ上げてきた。そんなこと知ったことか。何て失礼な熊だ。熊はそんな孝史の怒りなど、蛙の面にシヨンベンといた風体でベッドの下に手を突っ込んだ。引っ張り出したのは数本のアダルトビデオであった。

「隣の部屋にあった。一緒に見よ」

孝史はため息も出なかった。燃えるゴミの日に喋る熊は出せるのだろうか。



二時に始めて熊の言葉を思い出した。二時に地下倉庫。戯言に決まっている。とは思って見たものの、行かなかった言い訳をするのも面倒だし、少し気になってもいた。孝史は何気なく席を立つと、地下倉庫に向かった。

地下倉庫は普段あまり目を通さない書類が、段ボール箱にしまわれて多量に保管されていた。しかしたまに必要となることがあるので、鍵は掛かっている。そっとノブを回すと、扉は音もなく開いた。何故か電気が点いている。誰かがいるのかもしれない。孝史は急にスパイにでもなった気持ちになった。

倉庫に入るとすすり泣きのような声が聞こえた。

幽霊？

一気に背筋が寒くなった。いいことなんて何もないじゃないか。慌てて部屋を飛び出そうとしたが、すぐに別の声がして動きを止めた。

「どうだ。いいだろう」

部長の声だった。というとはすすり泣きというのは、女性のあの時の声では。もしかして相手は由美子かもしれない。一瞬怒りに我を忘れそうになったが、孝史が席を立ったときに由美子は確かに仕事をしていた。では一体誰なのか。

孝史はそっと段ボールを回り込み、声の方を覗いてみた。

声の主は秘書課の綾香だった。なんということだ。部長は由美子に手を出そうとしておきながら、別に綾香にも手を出していたのだ。許せない。自分はここ数年女性の手を握ることすらできないでいるのに。思い知らせてやる。

とは思ったもののどうすればいい。

そこではたと気が付いた。携帯を持ってゆけと言われていた。携帯はちゃんと背広に入っていた。そして今時の携帯は写真が撮れる。撮った写真は誰に送ればいいのか？もちろん部長代理だ。部長と部長代理がいがみ合っているのは周知の事実だ。



部長代理が部長に昇進すると同時に、孝史の給料が上がった。そして孝史にはソフト造りの達人である、由美子が専任で指導につくことになった。

由美子は指導中は厳しかった。その甲斐あって、孝史は確実に実力を上げていた。

そして由美子は指導中以外は優しくかった。それもそのはず。こころのつかえが取れたのだから。そして新しい部長は、孝史が由美子に思いを寄せていることを知っているのか、由美子に今回の件は孝史のお陰であるような、そんな含みのある言葉を伝えたらしかった。いつしか由美子の孝史を見る目つきが優しくなっていた。

「私ねえ。本当に感謝してるの」

「え？何のことかな」

とぼける孝史に由美子は微笑んだ。

「みんな私のこと結構遊んでいる女だと思っているでしょう」

「そんなことないよ」

由美子は孝史を見て、いいのわかっているから、といった笑みを見せた。

「でも私本当は遊んでなんていないのよ。もう何年も男の人となんて付き合っていないし」

「由美子さんならよりどりみどりだろう」

「正直に言えば、何回か機会があったんだと思う。でも、私この仕事が純粋に楽しくて、それどころじゃなかった。ただひたすら毎日ソフトを追いかけていた。だから今の自分があるのも当然だと思っていた。だけど違った。私あの人に振り回されていただけだった。

去り際にあの人なんて言ったと思う？」

「さあ、分らないな」

「俺についてくれば、ゆくゆくは部長付きにしてやったのにな。だって。まるでおもちゃよ」

「もう大丈夫だよ」

「ありがとう。優しいのね」

ほんの少しの沈黙。決して不快ではない程度の。

孝史は今が、一生に一度あるかないかのチャンスであることを理解していた。一ヶ月前の孝史ならば、そんなときは駄目に決まっている、と考えた。そして失敗した後の自分を想像し、自分を笑ったものだ。

だが今日の孝史には自信があった。裏打ちのある自信。答えを知っている試験を受け

るようなものだ。時間も場所も予定通り。あとは予定の台詞を言うだけ。

「由美子ちゃん。今度の休み、空いているかな」

「ええ。でも何故」

「俺、実は結構料理の腕がいいんじゃないかと思ってるんだ。でも人に味見してもらような機会もなくて。よかったら味見をしてもらえないかな」

「喜んで」

由美子はそう言って微笑んだ。

孝史は部屋に帰ると、大きなため息をついた。

部屋は隅から隅まで空き缶で埋まっていた。そしてベッドの上には大の字の熊。いつも通りの高いびき。

「おい、起きろよ」

「なんや。孝史か。今寝入ったばかりやのに。えらい威勢がええやないか」

「今度、部屋に友達が来るんだ。こんな状態じゃ上げられないよ」

「どや。うまく行ったやろ」

孝史は由美子のことを考えると、自然と気持が高揚してきた。部屋に女性が来るのは何年振りだろうか。その気持ちもすぐに沈んでしまった。部屋があまりにも汚すぎる。

熊に地下倉庫に行けと言われ、部長の失態を目撃してから一ヶ月が経っていた。その間に孝史は昇給し、仕事の実力をつけ、そして憧れの由美子をものにする直前まで来ていた。それもすべて熊の助言があったからだとはわかっていた。

しかしその熊の助言のすばらしさに反比例して、熊の生活はすさんでいった。一体何が不満なのか、毎日酒ばかり飲んでいる。しかもその酒をどこから仕入れてくるのか、全くもって不明だった。

「そう心配すんなって。わいが今まで下手打ったことあるか？ないやろ。日曜日やな。わかっているがな。日曜日までに見違えるようにしたる。何て言ったって、わいの唯一の楽しみは孝史が成功するのを見ることなんやから」

孝史は自然と気持ちがなごんでいくのを感じた。そう全て熊に任せておけばいい。失敗などあるはずがない。なんととっても、俺たちは親友なのだから。

日曜日、孝史は初めて部屋に由美子を招待した。

駅まで由美子を迎えに出る一時間の中に、部屋は綺麗になっているはずだった。部屋の鍵を開ける時は、僅かに緊張した。もしビールの空き缶がそのままだったら。しかしそんな心配は杞憂であった。部屋は昔の綺麗な状態に戻っていた。どうやって綺麗にしたのか？そんなことはどうでもよかった。熊に任せれば安心なのである。

孝史は一時期凝った料理の腕を披露した。フランス料理のフルコースとは行かないが、見栄えは悪くない料理がテーブルに並んだ。そして途中で買ってきたワインのボトル。二人はワインで乾杯すると、心ゆくまで料理と会話を楽しんだ。

食事中、孝史は一瞬だけ熊のことを考えた。そういえば今日はどこに行ったのだろうか。どこにも見あたらない。しかしすぐに由美子との会話に熱中して熊のことなどすぐに忘れてしまった。

食事が進み、会話が弾み、ワインが減っていった。二人のこころをワインが鮮やかなばら色に染め上げた頃、偶然二人の指先が触れ合った。それまでの会話がまるで意味をもたなかったかのように途切れ、由美子がうつむいた。頬が赤く染まっているのはワインのせいだけではないようだ。孝史は思い切って由美子の手を握ると、驚いている由美子を強引に引き寄せ、そして唇を奪った。

長いキスの後、吐息に混じって由美子の唇が動いた。言葉は発せられなかったが、何を言ったのかは理解できた。あなたが好き、と言ったのだ。孝史はそのまま由美子を押し倒した。

翌朝、由美子がシャワーを浴びている間、冷蔵庫から麦茶でも出そうかと思っていると、どこからか嗅いだ覚えのある煙草の臭いがした。ラッキーストライク。振り向くとテーブルに腰掛けて熊が煙草を吸っていた。

「おい、どこから現れた」

熊は何も言わなかったが、背けた顔がにやついているのが、孝史にはわかった。熊はどこかへ出かけたのではなかったのだ。どこかに隠れて二人の行為を盗み見していたのだ。

「なんて奴だ」

「おい、大きな声を出すと、彼女に聞こえるぞ」

「うるさいこの恥知らず」

「いいやないか。うまくいったんやから。そう熱くなるなや」

孝史は熊の言うことに耳も貸さず、胸ぐらを掴んだ。

「おい、今度こんなことをしてみろ。ガスレンジであぶって焼き熊にしてやるぞ」

「ねえ、誰と話してるの」

声と同時にバスタオル一枚の姿で、由美子がバスルームから出てきた。由美子は片手でタオルを押さえ、もう一方の手で髪を梳いていた。なんとも悩ましい姿だ。見とれていた孝史は、熊を隠すことすら忘れていた。

「あら、テディベアじゃない。わたしテディベア大好きなのよ。知っていたの？私が好きなこと」

由美子は孝史の答を待たずに熊を抱え上げた。その拍子にタオルが床に落ちた。何も知らない由美子は、熊で露わになった胸を隠した。

「恥ずかしいから見ないで」



全てが順調だった。自分がこれ程までに順風満帆な人生を歩むなんて夢にも思わなかった。熊の助言のお陰で孝史は昇進すら果たしていた。もちろん孝史を引き上げたのは新しい部長だ。そして由美子とは半年後に結婚する約束をしていた。輝かしい毎日。約束された未来。完璧と言えた。そんな完璧な日々に影が射すことなどないと考えていた。この時までは。

日曜日、孝史の部屋に来た由美子はいつも以上に颯爽としていた。人差し指にぶら下げられたBMWのキーホルダー。新車が納入されたので孝史をドライブに誘いに来たのだ。会社では見せないような、ニットのシャツに、ライトブルーのスラックス姿。外出用のいで立ちというわけだ。

由美子のBMWは3シリーズといわれるタイプで、若者向けの味付けがしてある。しかし値段は決して安くはない。由美子は先日の昇進を機にローン組んだのだ。だが問題は何もなかった。由美子の年収ならば、贅沢をしなければ楽に返せるだろう。

「どこへ行きたい？どこでも連れて行ってあげるわ」

「よし。ちょっと季節の早い海を見に行こう。BMWには初夏の海が似合う」

孝史は決まっていた台詞を言う。もちろん熊の助言だ。

「BMWにはどこだって似合うのよ。私が運転すればね」

由美子は力強い笑みを見せた。

二人はBMWに乗り込むと、鹿島の海岸まで足を伸ばすことにした。国道から由美子の知っている県道に入り、しばらく走った後、海が近いことを知らせる広い水路を渡った。窓を開けると潮の香りがした。ドライブはしごく快適だった。由美子の下手くそなブレーキの踏み方以外は。

「もう少し徐々に踏めたら」

「性能がいいんだからしょうがないじゃない。だいたい車も持っていない人にそんなこと言われたくないわ」

由美子は意地悪めいた視線を送ってきた。二人の間ではよく孝史が車を持たないことが、冗談のネタにされていた。だが孝史は車には興味はなかったし、もっと大きな買い物をする計画を、密かに考えていた。通勤圏内に一戸建てを買おうとしていたのだ。結婚と同時に一戸建てに入居する。そして子供を作って、親子で楽しく暮らそう。十年も経てば、自分は部長代理くらいには昇進しているかもしれな。いやいやこのまま実力を伸ばせば、部長だって夢じゃない。部長になった暁には、由美子に大きなダイヤでも買ってやろう。

完璧な未来像。

由美子は未来のことなど何も知らない。孝史はほくそ笑んだ。

「嫌ねえ。何にやついているのよ」

海岸通りに入ると景色はすっかり海沿いのそれになった。ただひたすら防砂林の中を走る道路が延びていた。防砂林の向こうには広大な海が広がっているはずだ。そしてまだ海の季節ではないせいで、人はほとんどいなかった。夏には混合いそうな駐車場に入ると、数台の車が停まっているだけだった。そして前面に青い海が広がっていた。

二人はしばらく海岸を散歩した。風が強かったが、日差しが強いせいで日焼けしそうだった。

「あーん。日焼け止め持ってくればよかった」

由美子は日焼けを気にしていた。

「いーじゃん」

「良くないよ。シミになる。それに袖の後がつくのも格好悪いから」

「そっちなら問題ない」

「なんで」

不思議そうな顔をしている由美子を、孝史は砂の上に押し倒した。

「どうせすぐ脱いじゃうんだから。さっきの言葉のお仕置きをしてやる」

由美子は驚きの表情から、いたずらな表情へと変わった。

「こんなところで、エッチ」

まだ何か言おうとする唇を孝史は自分の唇で塞いだ。

駐車場を出るとき、孝史はまだ由美子とのすばらしい行為を、頭の中で反芻していた。この美しい由美子が、自分の腕の中で身もだえする様子。眉根に寄った皺。甘い声。孝史は再び気持ちが高ぶっていくのを感じた。

由美子は手を伸ばせば届く所にいる。孝史は現実であることを確認するように、由美子に手を伸ばした。

由美子はすぐに反応した。

「ばか。駄目よ運転中なんだから」

「こんないい女を目の前にして、我慢をしろなんて、酷い話だ」

熊の助言は海岸沿いのレストランで夕食。でもまだ時間はたっぷりある。

「子供でも轢いちゃったらどうするのよ」

そう言いつつも、由美子は孝史の手をどけようとはしなかった。

「子供はこんな場所にはいないよ」

道路は直線。見通しは抜群だった。左右は防砂林で脇道もない。BMWは時折僅かにセンターラインをまたいだりしたが、しっかりと走っていた。

孝史が由美子のシャツをまくり上げようと両手をかけたとき、ものすごい衝撃が二人を襲った。孝史は一瞬地震だと思った。同時に金属がひしゃげる耳障りな音。由美子の悲鳴。エアバッグが開く爆発音と、シートに押しつけられる感触。視界の無いまま、何か柔らかくて大きなものを踏み越える感触。ブレーキ音。

そして静寂。

唐突に孝史は車から転げ出た。BMWのブレーキ痕の先に人が倒れていた。

そんな馬鹿な。

孝史はがっくりと膝をついた。救護活動をするなんていうことは、微塵も頭に浮ばなかった。頭の中にさっきの衝撃と音が戻ってきた。

ものすごい衝撃。金属がひしゃげる耳障りな音。何かを踏み越える感触。

ものすごい衝撃。金属がひしゃげる耳障りな音。何かを踏み越える感触。

ものすごい衝撃。金属がひしゃげる耳障りな音。何かを踏み越える感触。

孝史は嘔吐した。

車の中から切り裂くような悲鳴が上がった。由美子が今ようやく事態を理解し始めたのだ。その悲鳴につられて孝史はのそのそと前に進んだ。背後では悲鳴が何時までも続いていた。孝史は明確な論理で前に進んでいたのではなかった。ただ、勝手に身体が悲鳴に反応しているだけだった。そして被害者の前まで来て再び吐いた。

由美子のBMWは被害者を足の先から頭までしっかりと轢いていた。体中から血が噴き出しているのは言うに及ばず。腹が裂けて内蔵がはみ出し、胸は紙で出来ているかと思わせるほどぺったんこに潰れ、そして頭は踏みつぶしたトマトみたいになっていた。轢いてしまったのが男なのか女なのかもわからない。

孝史は胃の中が空になっても吐き続けていた。

悲鳴はまだ続いていた。

警察が全ての処置を終えたのは朝方近くだった。

一体なぜこんなことになってしまったのか。孝史はぼんやりとした頭で考えた。

孝史が由美子にちょっかいを出したから？

だとしてもあの男どこから現れたのか？

こんな所で何をしていたのか？

どうして車に気がつかなかった？

考えても答えは何も出てこない。頭に浮ぶイメージと言えば、

ものすごい衝撃。金属がひしゃげる耳障りな音。何かを踏み越える感触。

孝史は頭を激しく振った。

白み始めた群青色の海岸通りを、パトカーのテールランプが遠のいていった。そのパトカーには茫然自失状態の由美子が乗っていた。由美子の両手には手錠がかけられていた。



その日は会社で、一体どんな仕事をしたのか、まったく頭に残っていなかった。食欲はなく、何かを食べられる状態ではなかった。ただ休むとあのときの情景が蘇ってしまいそうだった。何かを忙しくこなしているほうが、気が紛れた。

夜中まで仕事をし、最終電車で自宅に帰った。自宅まで続く外灯の灯りが、どこか異世界を思わせた。最後の角を曲がったところで、その外灯の下に大きく真っ黒な穴が開いていた。孝史は思わず悲鳴をあげそうになった。

だがそれは穴ではなかった。黒衣の男が立っていた。よく見れば黒いスーツにグレーのワイシャツ姿だった。ネクタイまで真っ黒だ。男は黒いつば付き帽子を深々と被っていた。帽子の陰で顔は見えなかった。

何か違和感がある気がしたが、それが何だか孝史にはわからなかった。ただ、なんだか身体から体温が吸い取られていくような感覚をおぼえた。

男は優雅な身のこなしで孝史を避けると、軽く会釈をして駅に向かった。

そういえば孝史は終電車に乗ってきたはずだ。そう思い、振り向くと男の姿は既に無く、どこまでも冷たい光を放つ外灯が連なっていた。

自宅に戻ると冷蔵庫からビールを取り出して一気に煽った。ビールを飲むと気持が幾分落ち着いた。そして逆に昨日の出来事が強い現実味を帯びて蘇ってきて、思わずビールを取り落としそうになった。今朝まで覚えていたあのフラッシュバックのような感覚ではない。事実としての認識。自分たちは人を跳ねてしまったという事実。由美子はこれから刑務所で過ごさねばならないという事実。自分たちの結婚はもう永遠に行われぬという事実。

孝史は急に怖くなった。どうすればよいのか。つい昨日までは順風満帆だったではないか。それが自分の人生であり、このような形での挫折はあり得ないはずだ。自然と涙が頬をつたった。

孝史は転げるようにベッドに向かうと、いつものように酔って寝ているはずの熊を起こし、助言を貰おうと思った。昨日の助言を熊が与えたということは、敢えて考えなかった。

熊はいなかった。

「そんな」

孝史は体中の力が抜けてしまった。

「わいならここにおるで」

振り向くと熊は筆筒の上にいた。あぐらをかき腕組みをしていた。何かを思案中なのかもしれない。しかし今まで一度だってあんな風に思案をしていたことはなかった。いつだって熊は間髪入れずに助言を吐き出した。まるで孝史が質問をしてくるのを待っていたかのように。この違いが孝史を若干不安にさせた。それでも孝史は助言を求めずにはいられなかった。

「助けてくれ。由美子が」

「説明せんでもわかつとるがな」

やっぱり熊はわかっていた。

「由美子ちゃんがえらい目に遭うとるんやろ。今それについて思案中やねん」

孝史は溺れかけている最中に、救命具を掴んだような気持だった。これで安心だ。全て熊に任せておけば安心なのだ。

「どうすればいい？」

「この件に関しては、ちょっと考えさせてんか？時間が必要やねん」

孝史は冷や水を浴びせられたような気分だった。考えさせるとはどういうことなのか。熊の背中に隠れているウィスキーの瓶も気になる。普段熊はビールしか飲まないのだ。その疑念を覆い隠すように熊は口を開いた。

「それより明日の会議やねん。先ずはこれを制さねば、成るものも成らん。明日の会

議は新入り課長に話を振れ。やつの計画を先行させた方が利が大きい」

翌日の会議は熊の助言通り、新しい課長に発言を求めた。課長の長期開発計画は理に適ったものであり、誰もが納得したかに見えた。ところが課長の計画は、設計依頼元である会社の合意がとれていないことが判明し、降り出しに戻った。

しかし課長の孝史に対する態度は降り出しには戻らなかった。

「俺に恥をかかせやがって」

課長は孝史にそう毒づいて会議室を出ていった。最近、部長はこの新しい課長とえらく仲がいい。席に戻ると部長と課長が話をしていた。一瞬孝志を見た部長の目には、感情というものがなかった。

孝史は足許が崩れていく感覚をおぼえた。波が引くときに足の下を砂を削り取っていく、あの感覚に似ていた。事故以来何かが変わった。

魔法が消えた。

そんな言葉が思い浮かんだ。今夜あたり熊とじっくり話し合ってみる必要があるそう。会議程度ならばかまわない。しかし由美子はいま拘置所にいるのだ。ここで下手を打つわけにはいかない。

アパートまでの道すがら、孝史は熊に休暇を勧めようと考えながら歩いた。そして前方の外灯の下に、黒づくめの何者がかうごめくのを認めた。咄嗟に先日の記憶が蘇った。黒いスーツの男。横を通り過ぎただけなのに、体中から体温を奪われたような感覚。なんてことはない、ただの思い違いなのだろうが、それでも生理的な拒否感があった。

孝史は外灯の光の輪を避けるように、進路を僅かに変えたのだが、その時信じられない光景を目にした。黒いスーツの男が二人に分裂した。さらに三人に分裂した。そして孝史に向かって素早く近づいてきた。身動きする間もなく周りを囲まれ、孝史は背筋が寒くなった。

ところが黒いスーツの男と思ったのは、黒っぽい服を着た別の男たちだった。よく見れば、男たちの先頭はパンチパーマのチンピラ風の男、隣の半田であった。

「おい、こら」

「半田さん。一体どうしたのです」

「どうしたじゃねえ。いつになったら出ていくつもりだ」

先日の記憶がさっと蘇る。半田は孝史を追い出すつもりなのだ。

「出ていくつもりはないです」

「えらい強気じゃねえか。大家も考えるって言うだけでしょう。こうなったら力づくで出ていってもらうしかないよな。なあみんな」

周りで金髪の若い男たちが頷いた。いかにも舎弟っぽい風貌だ。

「力ずくってどういうことですか」

「こういうことだよ」

半田は陰に隠し持っていた木刀を大きく掲げた。

孝史の背中に一気に汗が噴き出した。このままではやられる。

半田が木刀を振り下ろすより僅かに早く、孝史は三人の隙間に突進した。孝史が後退と思っていた半田は、孝史が突進してきたので一瞬ひるんだ。その隙をついて孝史は半田の攻撃をかわしてアパートに向けて走り始めていた。

「待てこら」

後ろで三人が口汚い言葉を発しながら、追いかけてくる気配を感じた。日頃運動していない孝史にとって、アパートまでの二百メートルは地獄のレースであったが、辛くも半田たちの手に落ちる前に部屋に逃げ込むことができた。

半田はドアの前で

「覚えているよ。チャンスはいくらだってあるんだ」

と捨てぜりふを吐いて立ち去った。

どうなっているんだ。何でこんな目に遭わねばならない。つい先日まで順風満帆だったはずなのに。誰か説明してくれ。

孝史ははたと気がついて熊をさがした。熊なら説明できるはずだ。だが熊は部屋にはいなかった。

翌朝五時に部屋を激しくノックされた。半田だ。嫌がらせであろう。しかし半田にだって仕事がある。いつまでもノックしている訳にもいかない。ノックの音は数分で止んだ。

ノックの音ですっかり目が覚めてしまった。昨夜熊は帰ってこなかった。どこで何をしているのか。暇なので孝史は外を窺いながら、階段下の新聞受けから新聞を取ってきた。半田は仕事にいったのだろう。階段を上ろうとして身が竦んだ。階段の上に半田が仁王立ちしていた。

「仕事に行ったと思ったんだろう。そうはいくか。このタコ」

半田は孝史が逃げる間もなく階段を下りてきて、孝史の胸元を掴んだ。

「おい、いつになったら出ていく」

「出ていきません」

半田は孝史の手から新聞を取り上げると、孝史の頭を力の限り新聞で叩いた。勢いが強かったため、新聞のちぎれかすが飛び散った。孝史は思わず腕で頭を庇い、しゃがみ込んだ。

「出ていけ。出ていけ。出ていけ。出ていけ。出ていけ」

半田は憑かれたように同じ言葉を繰り返しながら、孝史を叩き続けた。

いつの間にか半田はいなくなっていた。孝史は破けた新聞を拾って部屋に戻った。

熊は相変わらず姿を消したままだ。時々吸い殻を見掛けるので、出ていった訳ではないらしかった。

数日後孝史を打ちのめす出来事があった。由美子が、有罪が確定した直後に自殺したのだ。

履いていたズボンをロープにして、ドアノブまでの僅かな高さで首を吊ったのだ。

あの笑顔はもうこの世にないなんてどうして信じられるだろう。孝史は告別式に出た後でも、まだ由美子が死んだという事実を受け入れられずにいた。

半田は出勤時間をずらしてまで、孝史を捕まえることに執着した。毎朝孝史の出勤時間に合わせて待ち伏せし、運良く孝史を見つければ新聞が破けるまで孝史を叩き続けた。

。

半田のせいで遅刻が増えた。会社の評価は著しく下がった。

順風満帆。全て完璧。

孝史は時々そんな言葉を思い出して、笑いが止まらなくなった。全ては瓦解した。熊の助言は最早何の役にも立たない。



その日も孝史は運悪く、半田に捕まった。半田は孝史を捕まえることが日課になっていた。そして半田の喜びにもなっているらしい。半田は新聞がぼろぼろになるまで孝史を叩くと、新聞を放り投げて去っていった。

叩かれている最中、孝史の目の前に落ちてきた切れ端が孝史から全ての思考を奪った。切れ端にはこう書かれていた。

東亜ソフト脱税容疑で強制調査

孝史の会社だ。一瞬何のことかわからなかった。だが慌てて捨てられた新聞を拾い関連記事を探した。それらしい記事がすぐに見つかった。一体何分その記事を見つめていたかわからなかった。

孝史が勤務している東亜ソフトは、過去五年にわたって脱税を続けていたこと。その金額は五億円を超えること。現在の経営状況を考えれば、業務遂行は難しいこと。などが書かれていた。そして記事の中に自分の名前を認めたとき、孝史は頭の中が真っ白になった。記事は脱税は組織的な犯行で、その主犯格の一人に孝史がいると書いているのだ。たった今、この時から孝史は犯罪者になったのである。本人が無実かどうかなど関係がない。社会的にはもう犯罪者であることが決定されたのだ。

完璧な人生。全て順調。ものすごい衝撃。人生がひしゃげる音。ゆっくりと踏みつぶされる感触。

孝史は笑い始めた。そして笑いが止まらなくなった。おかしいじゃないか。これが笑わずにいられるだろうか。そして笑いが最高潮に達したところで、吐いた。

もうここでは暮らせない。半田に抵抗し続けるのも限界に達していた。こんな記事がでてしまったら、ここではもう暮らせないし、実家に帰ることもできない。名前を偽って、どこか遠いところでひっそりと暮らすしかない。逃げなければ。兎に角逃げなければ。

孝史はふらつく足で階段を上り、ドアも開けっ放しのまま衣服を鞆に詰め始めた。そしてたった一本だけ持っている、ダンヒルのネクタイを手にしたとき、視線がネクタイの細い部分に釘付けになった。急激に由美子の死を実感した。

死のう。

こんな生活にはもう耐えられない。だったらいっそ死のう。

逃げたってどうせ捕まる。だったらいっそ死のう。

由美子はもういない。だったらいっそ死のう。

孝史は震える手でネクタイを輪にした。一端を結ぶ場所を探した。そして壁の穴に目が行った。あの穴に金具でひっかければ手頃だ。

孝史は椅子に乗り、穴に手を突っ込んでみた。中はひんやりとして、結構広かった。棒の様な物を入れて、口に引っかけることは出来そうだった。

中には何を引っかけるべきか。適当な物を探して首を巡らして初めて熊がいるのに気が付いた。

「うわっ」

孝史は驚いて椅子から転げ落ちた。

「何してる」

「何はないやろ、同居人に向って」

熊はそうやってウイスキーを瓶から直接飲んだ。ウイスキーを飲む様を見つめると、熊が呂律の回らない口で言った。

「文句あんのか」

かちんと来た。

「文句あるかだと、このくそ熊野郎。」

おい、俺がどうなったと思う。お前の助言のお陰でこの様だ。どうしてくれる。それに由美子がどうなったと思う。ええ？どうなったかお前なら知ってるんだろ？由美子が自殺したことも知ってるんだろ？どうなんだ」

熊は空になった瓶を放り投げた。

「ふん。知らないでか」

「何で止めなかった」

「止めるのはわいの仕事やない」

「仕事？」

熊は畳にぺっと唾を吐くと

「今までいい思いしてきたやろ」

と孝史に聞いた。

「なんだと」

「えっ。どうなんや。さんざんいい思いしたやろうが。叱られてばかりの、ボロクズ社員が昇進して。女みたいな趣味しとった奴が、あないない女とやりまくって。これがいい思いやなくてなんなんや。それもこれもみなわいのコトノハのお陰やんか。それをおどれ、わいをくそ熊扱いするんか」

孝史は今までと違う熊に戸惑った。何かに似ている。そう、結婚詐欺。今まで甘い言葉をかけてきた男が、急に豹変する。まるでそんな感じだ。同時に孝史の中でふくらんでいた、せっぱ詰まった何かが急激に萎んでいった。

「それが、どういう関係がある」

「関係おおありやわい」

熊はベッドの下から新しいウィスキーを取り出し飲み始めた。そして大きなゲップ。「わいはおどれに投資したんや。それがこの様や。一体どうしてくれんねん。あれだけのコトノハ貰うのにいくらかかったと思ってんのや。わいの借金どないしてくれんねん」

言うが早いか、熊は中身の入った瓶を孝史に投げつけた。

「わいの人生返せ」

熊は喚きながら台所に走った。戻ってきたとき、熊の手には包丁が握られていた。血走った目が、熊が正気ではないことを如実に物語っていた。

「自殺せえ」

「えっ？」

「早う自殺せえ。途中やったやろ。邪魔せえへん。ちゃんと最後まで見届けたる。早う自殺せえ。おどれみたいなクズ滓でも、ちったあ借金の足しになる。自殺して精算せえ」

熊は包丁を突きだした。

孝史は完全に飲まれていた。さっきまでの怒りも、絶望感も全てが押しやられていた。包丁を突きだした、血走ったボタンの目をした熊が自分に自殺を迫っている。きちがい沙汰だ。

「怖じ気付いてできん言うなら、わいがやったろか。ひと思いにざくっと」

自分の考えが最良だと思い始めたのか、熊はひとつふたつ頷くと、腰を低く構えて孝史に突進してきた。

しかし所詮は体調五十センチ程度の熊のぬいぐるみだ。孝史は足のひと振りで軽く熊を撃退した。それでも包丁はまだしっかりと握られたままだ。孝史は止めを刺そうと熊に駆け寄った。そして高々と足を持ち上げて、頭を踏みつぶそうとしたとき、初めて熊が泣いているのに気が付いた。

「わいは終わりや。完全に終わりや」

熊は泣きながらそう呟いていた。



「一から説明してくれ。まずお前一体何者なんだ」

今熊は孝史の前で正座していた。包丁はすでに台所にしまわれていた。孝史はこの目の前で正座する熊のことを、実はなにひとつ知らなかった。

熊はひとつ溜息を漏らすと、ぽつぽつと語り始めた。

「わいは妖怪や。しかも妖怪といっても石楠花クラスやねん。菊クラスや、桔梗クラスの昔話で活躍する連中とは全然違う、低級妖怪やねん」

確かに喋る熊のぬいぐるみなんて、妖怪以外の何者でもない。

「妖怪って死に神とは違うのか。お前俺に死ねと言ったんだぞ」

「やつらは別枠やねん。その別枠の連中なら窓の外におるがな」

孝史は窓に近寄ると、そっと外を観察した。駅まで続く道の外灯の下に、先日見た黒いスーツの男が立っていた。黒いふち付き帽子を被った男。この間すれ違ったあの男に違いなかった。

男は孝史が見ていることに気が付いたらしく、窓を見上げてきた。その顔を見て孝史は全身のから体温という体温を、全て吸い取られたような思いを味わった。昨日は帽子の下に隠された顔を見ることはなかった。だが今日のはっきりと見ることができた。男には顔がなかった。顔というよりも、そこには空間自体がなく、どこまでも続く永遠の闇だけが存在した。その闇は飲み込むべき何かを待っているかのようだった。

孝史は慌てて窓から離れた。

「どや。恐ろしげな連中やろ。あいつらには誰も手出しできん」

「あいつは俺を殺しにきたのか」

「違う。安心せい。さすがの奴らも勝手に殺人はできんようになってるんや。そやからわいらみたいな連中がおる。やつはわいが孝史の魂を持っていくのを待ってんのや」

「わい？」

熊が目をそらした。

「わいの仕事は自殺アドバイザーやねん。わいは初めから孝史に自殺を勧めるために、あの穴から落ちてきたんや」

熊が指し示した天井近くの壁には、ぽっかりと穴が口を広げていた。穴はさっきの死に神の顔のように、くろぐろとしていた。

「お前は人を自殺に追い込んで金を儲けているのか」

つまり今孝史のある状況も熊が仕組んだということか。

「おおかた当りやけど、そうやない。わいらの仕事はより質の高い自殺者の魂の提供や

。そんじょそこらの自殺なんて安いもんや。それを高い質に引き上げ、顧客を満足させるのがわいらの仕事や」

自殺者に質なんてあるものなのだろうか。その問いに答えるように熊が続けた。

「人の魂にはいくつランクがある。わいら妖怪のランクみたいなもんや。そやけど決して仏教のあれとは違う。平たく言えば、売れるか売れないかや。人間なんてわいらの世界では野菜みたいなもんやからな。その野菜を手塩にかけて育てれば、それだけ実入りもいいという訳や。

じゃあどんな魂が高く売れるかっていうとやな、いい思いを残して死んだ人間の魂や」

いい思い。

さっき熊が言っていた言葉だ。つまりそれは最近まで孝史が実践していた人生ということだ。

「そやけどいい思いだけやと人間成仏してしまう。そこで思いが残るように自殺にし向ける。この自殺というのがまた難しい。ぱっと死なれてしまうと、思いが残らんのや。だから人生の絶頂まで迎えさせて置いて、その絶頂への思いが残るように適度な転落を経験させる。そして行き着くところが自殺というのがベストや。いい例はマリリン・モンローやろうな。あの仕事は今でも伝説や。

そやから、わいらはいい思いをさせるために、いろいろと手を尽して、借金までして人間を惑わす『コトノハ』を買う。そして孝志みたいな幸せにあまり近くない思うとる人間に使い、持ち上げるわけや。

そやけどわいはしくじった」

熊はひときわ大きなため息をついた。

「俺を自殺に追い込むために事故を起こしたり、由美子を……」

そこで孝史は言葉に詰まった。由美子はもういない。あの美しい由美子はもういないのだ。

「あれは別の奴の仕事や。お陰でわいのスケジュールが狂ってしもうた」

「別の奴？」

孝史は思わず尋ねた。

「そや。わいらの世界は厳しいんや。いい野菜があれば、先にそいつを摘んだもん勝ちやねん。

わいは孝史にいい思いをさせるために、由美子ちゃんという駒を用意した。でも誰かが由美子ちゃんの方が売れ筋やと思ったんやろ。そいつはわいの投資に乗っかり、まん

まと油揚げかっさらったちゅう訳や。

でも結局は由美子ちゃんの魂も、仲介屋である死に神を通過していく。儲かるのは死に神連中ばかりや。けったくそ悪い」

まるで会社の出世競争みたいじゃないか。誰かが誰かの足をひっぱり、空いた椅子にその誰かが座る。そしてその誰かも何れは誰かに足を掬われる。

「俺の魂を売るとお前は何を得るんだ。俺を殺してお前は何を得る」

熊はふんと鼻を鳴らした。

「借金をちゃらにして終わりや」

僅かにこみ上げてきた怒りも、哀れみの川に押し流された。騙し合い。敗北。そして借金。まるでサラリーマンだ。孝史と何ら変わらない。だとすれば聞いてみたいことが一つあった。

「さっきお前失敗したって言っていたな。このあとどうなるんだ。失業でもするのか」

熊の顔から血の気が引いていった。身体は小刻みに震えている。

「どうしたんだ」

「わいらには失業はない」

「なんだ。じゃあ俺よりましじゃないか」

「失業はないが、ランク換えはある。難しい仕事をこなせない妖怪は、当然簡単な仕事に振り替えられる。同時にランクも落とされるんや。人間は仕事が変わっても人間のままだけど、わいらは仕事が変わると、姿もそれ相応に変わる。次はどないな姿にされてしまうのやら」

熊の姿も決して本人の望んだ姿ではなかったのだろう。孝史はもし姿を変えられてしまふとしたら、どんな気分なのだろうと思い、ぞっとした。

「これでも昔はわいも、男前やったんやで。わいは今石楠花クラスやけど、次は秋桜クラスやろなあ。秋桜クラスの連中は蛇や蛙と変わらんからなあ。嫌やなあ」

いつしか熊の顔色は戻り、震えも止まっていた。諦めがついたのかもしれない。

誰だって今ある基盤を失うのは怖いし、姿を変えられるのであればなおさらだろう。つい自分の足元は永遠不滅のように思ってしまふ。しかし実際は足元が崩れることなどおうおうにしてあることなのだ。同じ基盤を踏んだまま人生を終えられる人は幸せだ。

「まあええやろ。また一からやり直しや。また石楠花クラスまで上がるのに百年ほどかかるかもしれんけどのう」

百年か。気が遠くなる話だ。孝史はせいぜい人間でよかったと思った。

「よっしゃ。わいはもう諦めた。クラス替えになれば、借金も帳消しやし。気楽にいこか。孝史乾杯と行こうや」

熊はそう言うと冷蔵庫にビールを取りにいった。ついさっき、本気で自分を殺そうと考えていた相手と、ビールで乾杯をするというのも、実におかしな話だ。それに熊の借金は帳消しになるかもしれない。でも孝史の状況は何も変わらない。それでも孝史は熊を憎めなかった。熊の一言で何か救われたような気がした。

一からやり直し。

そうまた一からやり直せばいいじゃないか。刑務所に入るのかもしれない。それでも多くを望まなければ、やり直しは出来るはずだ。孝史は一杯やってもいいような気がしてきた。

ところがビールを取りに行った熊はいつまでも帰ってこなかった。

「どうした」

孝史が見に行くと、熊は冷蔵庫の前で玄関を見つめて竦み上がっていた。

その理由はすぐにわかった。身体から体温が吸い取られていく感覚。いつの間にか玄関の扉が開き、外に黒いスーツの男が立っていた。そして顔には真っ黒な闇。体温、感情、意志さえも吸い込んでしまう闇。孝史は殺されると思った。

しかし男は冷たい空気だけを残して去っていった。

「ふう。行っちゃった」

だが熊は一向に動こうとしなかった。それどころかさっきよりも酷い顔色をしていた。足許には冷蔵庫から取り出した缶ビールが二本転がっていた。

「わいは喋りすぎたらしい。クラス替えは一ランクやないそうや。一気に一番下の桜クラスまで真逆さまや」

黒いスーツの男はそれを伝えにやって来たのだ。

熊は必死に現実を笑い飛ばそうとしていたが、笑いは声にならず、引きつっているようにしか見えなかった。

「桜クラスってそんなに酷いのか」

「あれはもう妖怪やあらへん。ただのくそ溜や。妖怪脇の下や、水虫妖怪がおるところやねんぞ。俺に妖怪脇の下やれ言うんか」

孝史にはかける言葉もなかった。妖怪脇の下や水虫妖怪というのが、どんな仕事をしているの正確にはわからないが、想像はできた。そしてそこから今のクラスまで上がってくるのに、四、五百年くらいはかかるだろうことも。

孝史は床に転がるビールを拾うと部屋に戻った。

「こいよ。一杯やろうぜ」

「わかっとる」

熊はそう言いながら悲しげな視線を送ってきた。それでも動こうとしない。

「せやけど、無理や。乾杯はまたの機会まで預けとこか」

何故と聞く必要は無かった。熊にはもう時間がないのだ。空間に変化が生じていた。見ると熊の足許が溶けたバターみたいになり、波打っていた。

「おい、どうなっている」

「お別れの時間や。世話になったな」

「おい、待て」

孝史の気持ちを察したのか、熊は溶けたバターみたいな床に、少しずつ沈みながらも「安心せえ。疑いはすぐに晴れるやろ。それに一度ケチがついた商品には誰も手え出さん。つまり孝史ん所にはもうアドバイザーは来いせんゆうことや。由美子ちゃんのこととは残念やけど、人間百年も生きれば死ぬんや。わいらみたいに千年も二千年も労役の日々が続くわけやない」

熊はほんの少し小首を傾げた。

「孝史はソフト屋は向いとらん。次はインテリアコーディネータにせえ。これは『コトノハ』やない。わいの最後の助言や。掛け値なしのほんまの助言や」

熊はもう孝史を見ていなかった。

どこか遠いところを見ていたのか、もう目が見えなくなっていたのかもしれない。ただひどく年老いた、過去を懐かしむ表情を見せて笑った。

「ええな。人間は」

そして熊は身体の半分程溶けた床に飲み込まれていたところで、その形容が変化していった。頭も腕も溶けて流れ、うごめいた。アメーバみたいにうごめく姿を形容する術を孝史はもたなかった。ただ意識が存在するみたいであった。

やがてその不確かな存在は床に飲み込まれてしまった。床はしばらくの間ゆらゆらと揺らめいていたが、しばらくして何事もなかったかのように元に戻った。

孝史は試しにその床を拳で軽く叩いてみたが、いつもとかわらない、古びた板張りの床でしかなかった。いまごろ熊はどこにいるのだろうか。奈落への真っ暗な空間をひたすら落ちつづけているのだろうか。

部屋に戻ると二つの事実に気が付いた。

ひとつは天井近くの穴がふさがりつつあること。もう穴の大きさはピンポン玉ほどの大きさしかなかった。しかし孝史にとっても穴はどうでもいいことだった。

もうひとつはベッドの上にさりげなく置かれていた。いつの間にか買ったのだろう。いや熊のことだから借金をしてあの穴から取り出したのだろう。ベッドの上には求人情報誌が置かれていた。

孝史はベッドに腰をかけ求人情報誌を手にとると、ぱらぱらとめくり始めた。いつもよりビールは苦かったが一気に飲み干した。大きなゲップの音が軽快に部屋に響いた。

了